

欧米と日本の英語教育・方法論史における
神戸女学院の英語教育・教授法の流れ (I)

原 田 園 子

Summary

English Language Teaching at Kobe College: A Historical Review in the Light of English Teaching in Japan and Foreign Language Teaching in Europe and America (I)

Sonoko Harada

The ultimate purpose of this series of papers is to review and discuss the teaching of the English language (TEFL) at the college department of Kobe College within the history of English language teaching (ELT) in Japan which is reviewed in the light of the main changes in foreign language teaching (FLT) in the West. In this particular paper, FLT in Europe and America, ELT in Japan, and TEFL at Kobe College in the nineteenth century are discussed. The first section briefly reviews the grammar–translation method, and individual reformers' methods and the origin of the Reform Movement, which occurred in due time during the twenty years at the turn of the century, up to Palmer and Jones. The second section deals with the beginning and the spread of the study and the learning of the English language in Japan up to the advocacy of oral English teaching late in the nineteenth century. The difference in the process and the rise of oral language teaching between the West and Japan is pointed out. The last part attempts to investigate and record how English was taught at the very beginning of the "Kobe Home" and how English teaching became organized in the school system of "Kobe Eiwa Jogakuin" before the period of Miss Mary Stowe, who introduced a scientific way of TEFL and made the foundation of Kobe College English. Why and how the students could acquire communicative skills of English, as the students and the graduates' English ability was already highly evaluated, is also discussed. The discussion in the present paper, therefore, is limited to the period before the so-called "scientific" teaching and learning of a foreign language.

序

「神戸女学院の英語」は一般に高い評価を得てきた。「女学院の卒業生、学生は英語がよくできる」とも言われてきた。このような評価は110余年の学院の歴史の中で各年代の在學生、卒業生の英語を駆使しての社会での活躍がもたらした。これらの英語力の優れた彼女たちがどのような英語教育を学院で受けてきたかは、英語教育に携わる者の関心を持つところである。

「神戸女学院の英語」とは、今で言う所謂 communicative competence を“体得”した卒業生達によって示されているものに他ならないが、それではこの英語力を習得させ得た教授法は如何なるものであったか。神戸女学院という学校における英語教育はどのような内容のものであったのか。

現在、神戸女学院は中学部と高等学部そして大学部と大学院で構成されているが、英語教育の方法論に於いて特徴付けられるのは中学部における伝統的に受け継がれてきた direct あるいは oral method による指導法である。筆者の最終目標は、大学部における英語教育を論じるものであるが、1875年の学院創立前後の英語教育から、振り返って、歴史的にみていくことになる。何故なら、本学院が初等・中等教育機関より始まり、高等教育機関である大学設置を目指して歩んできたという歴史的経過があり、また、1885年の高等科設置は本校の当時の初等・中等教育を修了した者の若干名の進学希望者のために設けられたものであり、この高等科が順次充実され発展し今日の大学になったのだが、過去において大学部生の多くが本校で中等教育を受けた者達であったからである。更に、高等科生が予備科（小学部）や本科（中等部）低学年の授業を手伝ったり、高等科、専門部、大学部卒業生が教師となり、後輩の指導をしてきた事などは、「女学院教育」「女学院英語」を引き継いでいく一つの要素であったと考えられるからである。

神戸女学院の英語教育を歴史的に特徴付けるために、西欧の“語学教授法の歴史”の枠組みの中で“日本の英語教育史”をとらえ、その中で“神戸女学院の英語教育・教授法の流れ”を論ずる。110年余りの本校の英語教育にはいくつかの大小の節目があったが、それらのなかで教授法史上最も重要と思われる区切りは、1910年の Mary Stowe 女史着任であったと考えられる。神戸女学院で、英語教育学において論じられる“科学的”理論に基づいた教授法が取り入れられ、実践され、確立されてきたのは Stowe 先生が英語科の中心として活躍された頃からである。本稿では、この Stowe 時代に至るまでの、19世紀におけ神戸女学院の英語教育を論ずる。

今回扱う範囲の概略を年表にしたのが付表 A である。

本 論

第1章：19世紀

第1節：欧米における語学教育方法論

1900年までにヨーロッパ各地の、一般にグラマースクールと呼ばれ得る学校では主たるヨーロッパ言語を外国語としてそのカリキュラムに取り入れていたが、そこでの教授法は18世紀の学究的方法を踏襲したものであった。文法を学ばせ、この文法知識と辞書を使って原文を読ませるといふもので、その目的は読解力をつけさせることであつた。しかし、この方法はもともと独学法であつて学校で学ぶ学習者たちへの集団教育には適していなかつた。

19世紀の grammar-translation method はこういった従来の語学学習法を学校教育での語学教育に応用しようとした方法論であつた。従つて grammar-translation method は基本的にその名の通り文法知識習得と理解確認のための翻訳を残したものであつたが、この方法論の主たる目標は原文の代わりに文法規則の例示になる文章を与えることによって、語学学習をよりた易いものにしようとしたものであつた。

Grammar-translation method の創始者は Johann Valentin Meidinger (1756-1822) といわれ、フランス語教育におこなわれたものであつた。これをモデルとしたドイツでの英語教育への最初の応用書が Johann Christian Fick (1763-1821) によって著わされた *Praktische englische Sprachlehre für Deutsche beiderlei Geschlechts, nach der in Meidingers französische Grammatik befolgten Methode* [Practical English Course for Germans of both sexes, following the method of Meidinger's French Grammar] である。Practical“実用”という語が題名に用いられてはいるが、これはどちらかというところ“役に立つ”という程の意味であつた。しかし、このテキストの特徴は、従つて grammar-translation method の特徴は、色々な練習問題が載せてあり、特に、英語への訳と英語からの訳の練習が含まれていることであつた。このような練習をすることによって目標言語についての知識の正確さが目指され要求されていたのが grammar-translation method であつた。テキストは、初めのうちは、一課に一、二の新文法事項といくつかの単語、そしていくつかの訳の練習問題、という内容であつたが、徐々に難解な規則や単語の性別の長いリスト、例外の列挙というように“実用”とは程遠くなり、言語学書の体を帯びてきたのである。

こういった傾向に対して、学習に適するように段階別に一課に一、二に限定した文法事項を易から難へ配列し解説を限定し、練習をさせるようにした方法論 Practice Method を著わしたのが Johann Franz Ahn (1796-1865) の *A New, Practical, and Easy Method* (1834) と Heinrich Gottfried Ollendorff (1803-1865) の *A New Method of Learning to Read, Write and Speak a Language in Six Months* (1835) である。しかし、概して19世紀の語学書は、たとえ“実用的”とうたいながらも、その内容は文法知識を与えるための、もしくは著者のそれ

を披瀝するような“学究”的なものであり、実際的な習得のためのものとは言えないものであった。

19世紀後半には、工業化と交通手段の発達によって、国際間の行き来が容易になり、一般社会の人々が外国語と接するようになって、グラマースクールの教育を受けていない人々が外国語を必要とするようになった。こういった文法の知識の無い人々が、た易く学べ、しかも実用に即することばが習得できる方法論が望まれるようになった。これが19世紀末から20世紀初頭にかけての約二十年間の語学教育改革運動の必然性の一つであった。この頃、学者達の研究成果を待つまでもなく、これに先がけて、個々の語学教師たちのなかでより効果的な、そしてた易く学べる教授法を考え、実践していった人たちがいた。そういった教師達のなかに、フランスの Jacotot, Marcel, Guoin, イギリスの Prendergast がいた。彼らの考えは、続く20世紀に、改革運動期の主張を踏まえ“科学的”な教授法を発展させていった Palmer や West 等の先駆けをなすものもあった。

最初の、目標言語だけを使った一言語使用法 direct method を行ったのは、Jean Joseph Jacotot (1770-1840) で、彼は問答式のドリルをすることによって学習者が解説に依るのではなく帰納的に自ら言語規則を一般化できる方法を強調した。

Claude Marcel (1793-1876) の功績は、彼が今日で言う“ことばの四技能” hearing, speaking, reading, writing に注目し、「理解」と「発表」¹⁾の識別をしたことであろう。しかし、彼は、理解の方が先行すると言う考えに重きをおき、理解力の養成に関心を払いすぎ speaking より reading を強調して発音の正確さを軽んじたこともあり、伝達力養成という点で問題があった。

Thomas Prendergast (1806-1886) は、子供の母国語習得を参考にし、子供は一つ一つの語よりも、語がいくつかかたまりとなった区切りで理解していくのだとみて、これにならない外国語学習は、文単位で覚えて、覚えたものが即座に使えるように、暗誦出来るまで反復練習を重ねるものとした。これが彼の Mastery System であり、“慣用的に外国語をしゃべるわざ”²⁾と説明された手引書 *The Mastery of Languages* が1864年に出版された。

François Guoin (1831-1896) の Psychological Method と呼ばれる教授法は、人間の心理にそった一連の行動や活動を表現した一連の文章³⁾を覚えていくやり方で、目標言語だけを使って教える direct method である。改革運動が伝統的な方法論を批判していた同時代という時宜を得たこともあり、解りやすく習得しやすい彼のやり方は人々の関心をよびヨーロッパ各地で Guoin Method による語学学校が設立された。1892年の *The Art of Teaching and Studying Languages* は1880年パリでの Howard Swan による出版の英訳である。彼は、改革運動の真っ只中で Sweet⁴⁾等によって科学的な音声学に基礎をおいていないと批判され一時の流行ということになった。

同じく19世紀後半、科学的な音声学に基をおいた改革運動の流れからは外れてはいたが、アメリカでまず評判を呼び、次いでヨーロッパに紹介された教授法がある。Sauveur の direct method でもある natural method と Berlitz の direct method である。

子供が母国語を習得する過程を外国語学習に応用していくというのが natural method である。この、適切な条件が与えられれば直観力で習得していくという自然学習法を、語学学習に応用したのが Lambert Sauveur (1826-1907) の方法論である。彼によれば語学学習における“適切な条件”とは話し掛ける人、話す事柄、そしてその話を理解し、理解してもらいたいという熱意である。フランス語を母国語としアメリカへの移住者であった Sauveur は、学校教師でペスタロッチの object-lesson テクニックを標準ドイツ語の教授に応用して成功し、更にアメリカへ渡り、外国語としてのドイツ語教授で、評判を得ていたドイツ人の Gattlib Heness の学校でフランス語を教え、共に1869年ボストンに語学学校を設立した。これがさらに成功し、1874年 *An Introduction to the Teaching of Living Languages without Grammar or Dictionary* を著した。彼らのやりかたは、学習の最初の一月はテキストなしで口頭練習だけをやるものである。彼によれば、この期間目標言語だけで語り、身振りをそえて伝達しようとする教師の存在そのものが学習者を学習へとひきつけるというのである。教師は学習者に本気で質問し、真剣にその回答を学習者にもとめる。教師の発する問は、綿密に練られたもので次から次へと関連した問が生じてくるようなものにする。このように問を組み立てることによって、学習者は教師の談話がどのように進むのか、その内容を、察することができるのである。彼のこの方法論は、やがてアメリカの語学教育者の間で関心をよんだ。

同じ direct method で、目標言語を母国語とする教師が教える語学学校の経営に成功したのが、やはりドイツからアメリカへ移住した Maximilian D. Berlitz (1852-1921) である。かれはロードアイランド州のプロヴィデンスで Berlitz School of Languages を設立し、これが大成功をおさめ、その後欧米各地に Berlitz School を設置した。共通の方法論による各言語用の教科書が作られ20余ヶ国語がこの Berlitz Method で教えられることになった。

この頃19世紀末のヨーロッパでは、ドイツの Viëtor, フランスの Passy, イギリスの Sweet, デンマークの Jespersen 等の音声学・語学学者が語学教育に関心をもつようになった。これらの語学の研究者と語学教師との学際的な協力が、語学教育史上の改革運動であった。1882年の Wilhelm Viëtor (1850-1918) の小冊子“Der Sprachunterricht muss umkehren!” [Language Teaching Must Start Afresh!] を初めとし、音声学に基をおいた語学学習論類の発表、1886年の Paul Édouard Passy (1859-1940) による、その後国際音声学協会 (IPA 1897) に発展した、音声学教師の会設立、1899年の Henry Sweet (1845-1912) の *Practical Study of Languages: A Guide for Teachers and Learners* 等を経て、1904年 Otto Jespersen (1860-1943) の *Sprogundervisning* (1901) の英訳 *How to Teach a Foreign Language* (1904) までの約20年間に科学的な語学教授・学習が説かれたのである。彼らの主張したことは、音声学の科学的研究成果を取り入れた教授法で、話し言葉を第一とし、訓練を受けた専門家である語学教師が教え、訳読を排除し、文法は帰納法で習得させるものであった。学習者は音声学の知識に基づいた正確な発音が求められ、そのため音標文字も教えられた。

1884年の Sweet の論文“On the Practical Study of Language” は、語学教育の改革を主張したものであり、言語学と語学教育の協力を提唱する最初のものであった。彼は、音声学に基

づく訓練を受けた教師であれば、目標言語を母国語とする native speaker でなくても、訓練を受けていない native speaker 教師より外国語をもっと効果的に教えることができると、述べている。

1886年、英語教師であった Passy は自ら独自の発音記号を考えだし、授業でのその使用の成果を一般に広げようとして音声学教師の会を作ったのであった。彼の音声記号は単純・簡略化されたもので、当時の音声学者が音声表記の科学的な正確さ、完全性を追求していたのに対して、彼は学習用には出来るだけ一般化された分かりやすい記号でなければならないと考えていたのである。

1887年から1888年にかけて、シレジアの学校教師 Hermann Klinghardt がこの新しい運動の主張する方法論を実践してみた。入門期の最初の2週間は、聞き取りと発音練習だけで、その間に徐々に発音記号を教え、問答式ドリル中心の話し言葉だけの授業を半年続け、その後、書き言葉を導入した。一年の終わりには生徒たちは文法も帰納法によって習得しており、特に話し言葉に自信をえていたとの報告があり、学習初期における発音練習の重要性と話し言葉先修の効果性が示されたのである。

1888年の、語学研究者でもあり語学教師でもあった William Henry Widgery (1856-1891) の *Teaching of Languages in Schools* は、改革運動の主張する方法論を、語学教育現場の実際的問題に応用し、発音の教え方、音声記号の使用法、音標文字の扱い方、読解の指導法等について詳しい助言をしているものである。

1899年の Sweet の *The Practical Study of Languages: A Guide for Teachers and Learners* は、習得上の“理論的な進歩”を主張したもので、このために言語に関する正しい知識がなければならないとしている。文法は帰納的に教えられるものとし、発音の正確さが語学の習得の基本であるので、学習者には発音学の知識が必要であり、音標記号も学習されなければならないとしている。また、彼の方法論には、当時の心理学の連合・連想の理論が応用されており、学習とは、言語要素と言語要素の連合、そしてこれらの言語要素と外界すなわち意味・内容との連合を形成することだとしている。科学的な学問研究・言語分析の成果を語学学習に応用するという点において、今日の応用言語学的方法論の基が Sweet にみられるのである。

このような語学教育改革期に学徒、あるいは、教師として関わっていたのが続く20世紀前半に“外国語としての英語教育”の分野の基を築くことになった Palmer と Jones であった。

第2節：日本における英語教育史

1600年4月、英国人 William Adams (1564-1620, 滞日1600-1620)、後の三浦按針が、オランダ船で豊後に到着し、徳川家康に世界の情勢を語り、英国王 James I の国書を和訳し、家康の返書を英訳したりしたのが日本人と英語の関わりを始めとされている。1616年の家康の死、1620年 Adams の死により1623年英国商館が閉鎖され、1639年の鎖国令により、その後19世紀初頭まで日本は英語との関わりは無くなった。

1808年8月英艦フェートン号がオランダ旗を掲げ長崎に入港した事件をきっかけに、1809年蘭通詞6名がオランダ商館のJan Cock Blomhoff (1779-1853, 滞日1809-1813, 1817-1823)に英語を習う命を受けた。これが日本における英語学習の始まりである。この学習により、1811年、英単語や英会話を和訳した英学入門書『諳厄利亞興学小笈』,そして、1814年には、英和辞典『諳厄利亞語林大成』が作られた。これは、日本における最初の英和辞書であるが、発音はカタカナで示されており、しかも蘭語の影響を受けているものであった。1840年、幕府の翻訳局の蘭学が専門であった渋川六蔵 (1815-1851)によって、日本で最初の英文法書『英文鑑』が著わされた。これは、18世紀の英米の規範文法であった Lindley Murray (1745-1826)の *English Grammar* の蘭訳からの重訳であった。

1848年7月、焼尻島に漂着した米国人青年 Ronald MacDonald (1824-1894, 滞日1848-1849) が数ヶ月間蘭通詞14名に英語を教えた。彼が日本における最初の英語を母国語とする native speaker 教師である。英文を読ませ、その発音をなおし、英文の意味、構造を説明するという教え方であった。この時の学習者であった通詞がその編纂に従事した辞書『エゲレス語辞書和解』[A, B, 項のみ] (1850) は蘭語の影響を脱し米語に近い発音のものになった。

1851年、13才の時アメリカに漂流して10年間過ごした中浜万次郎 (1827-1898) が帰国し、幕府の命を受けて外公文書の翻訳等の公務に従事しながら英語を教えた。彼は帰国時ほとんど日本語を忘れていたと言われており、従って米語を母国語とする教師に極めて近かったと言える。彼は独自の教授法を考え出しており、彼が著わした、日本人による最初の英学書となった『英米対話捷徑』(1859) に示されているが、できるだけ米語に近い発音をカタカナで示し、漢文訳読式に文中の単語に番号とカナ文字をつけた直訳式解釈法であった。これにより、彼は日本人として最初の英語学者であったといわれている。

1853年6月と1854年3月のPerryの来航時、英語通訳詞として活躍したのはMacDonaldの弟子であった蘭通詞達であった。しかし彼らの英語は外交交渉の場では役に立たず、交渉はオランダ語を介して行なわれた。これをきっかけに、1855年幕府は、後に開成所となった洋学所を設立し、ここで、1862年『英和对訳袖珍辞書』が出版された。これは日本における印刷本としては最初の英和辞典である。

1856年8月、米国総領事 Harris が着任し、1858年日米修交通商条約が調印された。

1859年、神奈川、長崎、函館が開港され、以後Brown, Hepburn等の米人宣教師たちが次々に来日した。

Samuel R. Brown (1810-1880, 滞日1859-?, 1869-1879) は、James Curtis Hepburn (1815-1911, 滞日1859-1892) 等と1872年~1880年の新約聖書の翻訳に委員長として活躍すると共にPrendergastのMastery Systemを応用して英語を教えていた。

1860年、遣米使節団の随行船咸臨丸で福沢諭吉 (1835-1901) が渡米した。彼はこの一行の通訳中浜万次郎と共に *Webster's Dictionary* (1828) を一冊づつ持ち帰ったと言われている。

1862年、福沢諭吉は遣欧使節団に加わり、1866年にこの時の見聞成果が『西洋事情』として出版される。

1867年、福沢諭吉は再渡米し、この時多数の原書を購入し福沢塾の英語教科書とした。

同年 Hepburn は、中浜万次郎と同じように13才の時漂流中米国船に救助され、米国で勉強し帰化後、1859年帰国していた浜田彦蔵（1837-1897）、米国名 Joseph Heco より英語を学んだ岸田吟香（1833-1905）の協力で作製し、上海で印刷した和英辞書『和英語林集成』を横浜で発行した。

1869年、『英和对訳袖珍辞書』の増補改訂版『薩摩辞書』が発行された。これは薩摩藩の学生が洋行費を得るために上海で印刷したものであった。幕末、明治の初頭にかけて文明推進のため西洋に学ぶことを目的として当時の洋学研究所であった開成所／大学南校では外国人教師を招いたり留学生をイギリス、アメリカへ派遣したが、その頃各藩も英学を教育に取り入れ、外人教師を雇ったり、密航留学生を送ったりしたのであった。

1870年、神田及武（1857-1923）、矢田部良吉（1851-1899）、外山正一（1848-1900）が森有礼公使に随行して渡米し、1871年には、岩倉大使にともなって女子留学生5名が初めて米国に行った。この中に7才の津田梅子（1864-1929）がいた。

1872年に明治の新しい学制が公布され、中学校で英語が課せられるようになり、また小学校でも英語を教えることになったのを始め、日本の近代化に向けて多くの外国人が様々な分野で欧米から招かれ教師となって活躍した。さらに、1873年キリスト教の禁圧がとけ信教の自由が認められるようになると、欧米からの宣教師が次々と来日し、その数が増し、後に各ミッションスクールに発展していく私塾を開き、宣教と共に英語を教え始めた。英語は文明の息吹きと結びつき、西洋の進んだ知識と技術を得るための手段として学ばれるようになったのである。1870年～1874年にかけて、次々と英語学習用の単語集、辞書、独学書、手引書等が書かれており、英語学習熱のさまがあらわれている。

英語学習のテキストには、外国本や翻刻版が用いられていたが、入門者は Webster の『スペリングブック』（翻刻1880）で綴り字を学び、これを終えると『ピネヲ英文典』（翻刻1869、直訳1870）や Quackenbos の『英文典』（直訳1870）で英文法を学んだ。Willson の『リーダー』（翻刻1880）もその後多く用いられた教科書であった。

明治初期の英語はどのように教えられ、学習されていたのであろうか。片山 寛（1935）が書いているように、

これ程英学が盛んになっても外国人教師の居ない学校ならば oral work も実施せず、発音も正しく教授せず、漢文の素読同様な英文の読方や、日本式に面白い節をつけた読方を其儘教授して、語句を無茶につめ込む機械的暗記法に依るのであった⁹⁾。

のは想像に難くない。言語習得が何であるかの研究が進んでいなかった当時は、学習といえば書物を読み、知識を得ることであったから、語学学習も同じように、文法の規則や語彙を知識として得ることとしたのは当然であろう。また、生きた英語が使われる必要性も一般の人々にはほとんど無く、ことばの音声面の重要性もそれほど認識されていなかったであろう。

更に、例えこれに気付いてはいても、宣教師や政府招聘の外国人に直接に十分な指導を受けた教師もまだごく限られており、音声面指導の出来る教師がほとんど居なかったのも事実であろう。福沢諭吉の慶応義塾でさえも、1871年に三田に移転するまでは素読、会読、講義が中心で、読み方、訳、暗誦が行なわれ、三田に移転後は会読さえ廃止されて原書の解釈を主とする変則法で行なわれていた。翌年米人が招かれてから発音、アクセント、抑揚を正確に発し、和訳に頼らない解釈に導く正則法学科ができたのである。大方の学校では依然として先の中浜万次郎式の直訳式解釈法 (grammar-)translation method が大勢であった。1873年6月文部省顧問として来日したアメリカ人 David Murray (1830-1905, 滞日1873-1879) は、早くもその年12月に日本の英語教授法改善に関する意見を示し、Ollendorff の Practice Method を推奨している。

Japan Mail 紙 (1870 創刊) の主筆 (1881-) であった Francis Brinkly (1841-1912, 滞日1867-1912) は、『語学独案内』(1875) で独自の音標文字を使って発音の指導をし、さらに日本人の誤り易い用法にも言及している。彼はこの点において、1896年出版の『和英大辞典』と共に、当時の日本人の英語習得改善に尽くした。

1876年、外山正一と矢田部良吉、1879年、神田及武、1882年、津田梅子がアメリカ留学より、1883年、井上十吉がイギリス留学より帰国し、各人の日本の英語教育界での活躍がはじまった。

明治も1880年代になると中学校の数も増加し、英語学習者も増え、各種リーダーや文法書の翻刻や直訳版、独案内、翻訳が次々と出版されており、英語学習熱がますます高まってきたことがうかがえる。

当時のほとんどの公立学校では相変わらずの直訳読解式の英語の授業が行なわれていたが、1870年創立のフェリス女学院をはじめ、明治中期にかけて順次創設されていった宣教師のいるミッションスクールでは、外国人教師の徹底した話し言葉必修の、direct method 等による、授業が行われていた。1879年~1890年頃のミッションスクールの授業について、岡田美津 (1936) に以下の記録がみられる。

…ミッション女学校では、さすがに、本場の米人が教えるのであるから、世間に通用する、ほんとうの英語を学習することが出来た。教授法などというものは殆どなかったから、発音の法則も教えず、誤りを説明し訂正するでもなかったが、生徒は、日々西洋人の言うところを耳にきいているので、自分の言い方で変だと思ふ点は、いつとなく心附いて改めるのであった。授業のしかたは、米国式の recitation というやり方で、生徒は命ぜられた箇所を、辞書と首引きで調べ、全部を暗記してゆく。翌日教室で教師の問に応じて、それに相応するところを適宜に答える。教師は足りない点を補って説明したり誤りを訂正してくれる。教室では、一切日本語を使うことが許されず、教科書うのみの答えも認められず “Tell it in your own words” と言われるのが常だった。だから片言でも構わず言うか、そうでなければ黙っているより仕方がないので、詮方なしに、英語を使うことになって大変有効であった。単語でも教科書のままを使用すると、それは言い換えれば何ということかと訊か

れる。furious は very angry の意だなどと中々言われるものでないから黙っていると、英語辞書の備えてある室へ行って調べて来いと言って、そこへやられる⁹⁾。

このようにして生きた“ことば”として使える英語を習得させるための徹底した指導がされていたようだ。音声面については、日常西洋人教師に接する英語環境という適切な条件を与えられ、直観力を働かせる natural method で自然に native speaker の音声を知得していったことになる。

1880年代末より1890年代にかけて、留学より帰国していた外山、矢田部、神田等を中心に英語教授法の研究がなされるようになった。1887年『外国語研究法』と題して Marcel⁷⁾ の著作が翻訳され、1895年に高等師範学校（1872 設立）に英語専修科が設けられ矢田部良吉が主任となった。1896年には神田及武が雑誌『太陽』（1895 創刊）掲載の論文“English in Middle Schools”で英語運用能力をもった有能な英語教師の必要性和、英語学習の初期における訓練の重要性を説き、そのための教授法として Ollendorff や Prendergast の方法論に学ぶべきことを述べている⁸⁾。1897年出版の『英語教授法』で、外山正一が読本による英語教育の欠点を述べ、発音、アクセント、文法、同意語から生徒を指導し理解させ、反復練習をさせることの必要性を述べている。この書は彼が編纂した『正則文部省英語読本（全5冊）』（1889）の使用法を説明したもので、彼は話し言葉の運用力の養成を説いているのである。

1899年、高等商業学校の附属として設置（1897）されていた外国語学校が東京外国語学校に独立し神田乃武が校長となる。神田は1900年から翌年にかけてイギリスとドイツへ教授法研究のため留学をした。

このように明治中期には、それまでの訳読・読解の英語の書き言葉中心の学習から脱するべく、話し言葉学習の必要性が説かれ始めたのである。今日で言う、所謂“英語の運用力”をつけさせる学習法・教授法の研究の始まりである。同じ頃、第1節でみたように、欧米でも運用力養成の語学習得法が求められ、効果的な方法論の研究と実践が行われていたが、欧米では社会的・地理的状況から一般の人達が、つまり学習者が、それを必要としたという面が大であった。一方、日本では島国という地理的環境から、一般の人々が日常に英語を必要とする状況もほとんど無く、学習者にとっては、目標は伝達的手段としての英語の話し言葉よりも、あくまでも書物から知識を得るための手立てである英語の書き言葉習得であり、英語という言語について学ぶという、知識としての英語であった。日本においては、教師である英語学者から英語の話し言葉の習得の必要性が説かれ始めたのである。

第3節：神戸女学院における英語教育・教授法

1868年兵庫の開港と同時に神戸、大阪に外国人の居留が認められ、1873年2月キリシタン禁制の高札の撤去が発令された直後の3月31日、米国伝道会より派遣された宣教師 Eliza Talcott 女史（在職1873-1879、1882-1883）⁹⁾ と Julia E. Dudley 女史（在職1873-1879）¹⁰⁾ が神

戸に着任した。同年10月、花隈村の前田氏宅の一部を借りて私塾を開いた。この塾は英語を教える学校という形ではあったが、その目的はキリスト教伝道であり、歌と英語が毎日午後二時間足らず教えられ、生徒は20人前後で8才の子供から30才以上の既婚婦人達であった。歌は讃美歌等で、使われた本は *The Peep of Day* という子供用のキリスト教信仰入門書の小型小冊子であった¹¹⁾。この草創期における、手ほどきをどのようにおこなったか、Talcott 女史自身、次の様に書いている。

私達は讃美歌と日本語で祈禱をして始めます。一時間か、それ以上、英語の読み方と会話をして、日本語で旧約聖書物語をし、もう一つ讃美歌を歌って終わります。私は私の〔日本語の〕先生に“創生記”の最初の部分を中国語で読んでもらい、それを〔日本語〕で言ってもらっておられました。…私が生徒たちに話す物語を翌日彼女たちに言わせませす¹²⁾。

英語が教えられていたといっても、それは本来の目的であるキリスト教の教えを伝えるための言わば人集めの歌い文句であったわけで、明治の初めの文明開化政策もあって、人々が見知らぬ西洋人、西洋文化、そして英語にひかれていた当時としては当然のことであった。生徒の年齢も子供から中年層にいたり、適切な教科書も手に入れにくい状況で、外国語教授法の知識が無く、訓練を受けていない場合、考え得る指導の仕方としては、読みと、教師の側から主に問い語る簡単な会話でしかなかったであろう。しかし、読みは口移しの繰り返しであったであろうし、しかも英語を母国語とする native speaker の指導であるから、“正しい”発音が習得されていったことになる。

1874年4月、私塾が北長狭の、白洲氏所有の一軒家を学舎としてから、その年来日した宣教師 Peter Gulick 夫妻の、やはり宣教師であった子女 Julia A. E. Gulick が両女史を手伝い英語を教えた。1875年10月、山本通りに新築校舎を得て寄宿学校 Girls' School が開校された。授業開始当時は、小学校程度の学校で、午前中は日本人教師が教え、午後に英語、算術、地理、唱歌を Talcott 女史が主となって教え、時には Dudley 女史が代った。国語、国文、裁縫以外の科目は、時には日本語も混じることはあったであろうが、英語で教えられていた。

Talcott 女史は、学校を創めるにあたってキリスト教主義者である女子の教育指導者育成という使命を受けていた。従って、当然のことではあるが、英語を教える目的は、西洋の進んだ学問、知識、文化を教えると共にキリスト教精神の伝道のための手立てであった。朝夕の礼拝の時には英語の讃美歌が歌われ、英語の聖書¹³⁾が朗読され、おそらく英語混じりのたどたどしい日本語で話されたであろう説教には強い熱意がこもり、この熱意を受けて若き女子生徒達は理解しようと一生懸命耳を傾けたであろう。また、十分意味は解せなかったではあろうが、美しい讃美歌の英語の流れを聴き、口ずさんだことも英語学習への強い動機づけになったと考えられる。このような動機づけは、ことば〔英語〕習得への重要な一つの要素である。

1876年に Martha Jane Barrows 女史 (在職1876-1882)¹⁴⁾ が、続いて1877年に Virginia A. Clarkson 女史 (在職1887-1881)¹⁵⁾ が着任し、学内にアメリカ人教師が増えた。これらアメリ

カ人新任教師達は、来日してから日本語を学び始めたのであるから普段生徒達と接する時は、教師のたどたどしい日本語か、生徒のたどたどしい英語を使ってであつたらうから、生徒達は英語学習の入門期から伝達的手段として自ら英語を使っていたことになる。更に、当時の学舎が宣教師達の集会にも時折使われており、外国人の出入りがあり、生徒達は授業以外でも、身近に英語に接する機会が多くあつたことになる。このように、ことばとして英語が日常使われる環境に置かれていた生徒達の習得の成果は当然期待できるものであつたと察せられる。

当時の英語の授業の様子が1878年3月15日発行の『七一雑報』のGirls' School 授業公開の記事によりかいま見ることが出来る。

…女教師タルカット氏、バロウズ氏が復習を試みられしが第一第二「リードル」の組では原語と譯を讀せ又書生さん同志英語の談話もあり次の萬國史の組には暗射圖を似てアフリカの國府河等の名を尋ね夫より女王クレオパトラ等の事を尋ねられしに互々に史上の事をそらんじて細に洩れなく語りしは感をぞ起さしめたり。何となれば洋籍を直譯すれば其の言葉てんどうして聞く人には解し難きものなれども原文に係らず其意味を引抜て平常の談話物語するは甚だむずかしき事なり然るに彼の書生さんは言葉やかに陳文漢も混じえず…誰にでも解し易く物語りせしは全く教育の宜敷とこそ思われたり…。

リーダーの授業では、生徒達がお互いにも英語で言葉を交わし会話をしたことが分かる。また、訳があつたようであるが、これについては、教師の日本語力の問題もあつたであろうし、万国史の授業について「意味を引き抜いて普段の話し言葉で語っている」とあることから意識であつたと思われる。

この記事から察すれば、開塾以来5年間の英語の授業に何も特別な方法論があつたわけではなかつたようである。授業中に日本語も使われていて、一般に外人教師による授業と言うことから想像される direct method で行われていたのでもなかつたようだ。しかし、先に述べたように授業を離れても少なくとも4人の米人教師と生活を共にしていたという英語環境にいたのであるから、適切な条件のなかでの、直観力を駆使した natural method による習得過程でもあつたわけである。この時期の英語教授法・学習法は、言ってみれば、教師の側の未知・未開の地での教育とキリスト教伝道への熱意と、学習者の側の未知なる先進文明に学び、知識を得ようとする熱意とに依つたものであつたと言えよう。

1879年 Clarkson 女史が校長に就任し、校名が神戸英和女学校になり、学科課程が一新された。英語の授業は Clarkson 女史が担当するようになった。教師養成学校出身の Clarkson 女史は科目としての「英語」教育に力を入れた¹⁶⁾。1880年3月付の米国伝道会 Clark 博士宛 Clarkson 女史の書簡に「生徒達がやさしい英語の本が読めるようになってきた」との報告がある¹⁷⁾。更に同年6月付の書簡ではウェブスター辞書を所望するくだりで、「生徒たちが自分で辞書を引いて調べるようになった」とも書かれてある¹⁸⁾。開校当初数年間は、英和辞書は一冊しかなかったが、後に五、六冊の古い辞書を吉田作彌氏（在職1880-1883）¹⁹⁾ が購入したという事が

あった²⁰⁾。

1882年12月に第一回卒業式が行なわれ、卒業生12名、同期生7名のうち何人かは学校に残り、翌年3月まで勉強を続ける傍ら、ある者は英語初歩、英文法等を下級生に教えた。

同年 Emily M. Brown 女史（在職1882－1899）²¹⁾ が着任した。翌1883年校長に就任し、この年着任した Susan A. Searle 女史（在職1883－1915）²²⁾ と共に、1885年英語科、漢文科よりなる高等科を設置したのである。これが後の大学に発展していくのだが、カレッジ出身の両女史を中心に、以後教育の内容充実が注がれていった。

1886年、最初の卒業生教師として宮川とし（在職1886－1891、1893－1895）²³⁾ が英語を教え始めた。

1887年、学科組織が予備科2年、本科4年、高等科1年と改正された。予備科一年生の英語授業は、『リーダー』第一と第二、会話、書き方・文法があり、二年生では『リーダー』第三と第四、会話、書き方・文法であった。本科では、科目としての英語は第一学年の一、二学期、第二学年の二学期第五『リーダー』だけであったが、数学、英国史、万国史が英語で講じられた。高等科では、二学期、三学期に英文学が講じられた。

この年、英語の授業中に教師も生徒も日本語を一切用いないことが決められた。これが神戸女学院の英語教授法としてしばしば言及される direct method の始まりと言えるであろう。この“とりきめ”は、ことば使用上そして学習上において、音声の「受け取り」reception と意味の「理解」understanding の識別と、音声による「発表」production と意味の「伝達」conveyance の識別を認識した、語学学習上非常に効果的なことである。つまり、英語習得のための英語学習は、学習であるから授業の内容・意味が（教師によって）伝達され（学習者によって）理解されなければならないが、伝達、理解の手段としての言葉である英語でそれが行われれば、学習目標とその実践の一体化という点において、望まれるところなのである。

この同じ年、学内の英文学会が創立され、年に何回か発表会を催し、生徒達は英語でスピーチや暗唱をすることになった。これも英語力養成の促進になったのである。

1891年の学科組織改正後の英語の授業は、予備科では内容に変更がないが、学科表に『リーダー』がスイントンのものであることが記載されている。本科は3年制となり、第一学年では文法、英作文、第二学年では英作文、第三学年ではホーソンの作品、テニソン、スコット等の朗読法が教えられていた。高等科も3年制になり、第一年目小説、伝記、修辞学、第二年目英文学の授業があり、第三年目原語〔英語〕学、古代文学が日本語で講じられていたが、これらは、翌年英語で講じられることになった。英語授業の時間数は、予備科では週9時間、本科では週7時間～3時間と学期によって異なり、高等科でも4時間～2時間と学年によって異なっていた。その他、歴史、数学、理科の科目等は英語で教えられていたのは変わっていない。

1897年当時、前年の学科組織改正で予備科と本科が合併された普通科に入学希望であった、高等小学校一年を終えて予備クラスで勉強していた吉田其枝氏²⁴⁾は、入門期の Brown 院長による発音指導の徹底振りを次のように書いている。

英語を少しも知らない私達一人一人に、アルファベットの発音、殊に R と L のちがいが、th

〔θ〕〔ð〕をきびしく何回も何回も御自分の口を大きく開けて舌の動きなどをお示しになりながら、先生が御満足のいくまで繰り返して教えて下さいました。…母親が子供に教えるように優しく、にこにこ笑顔で教えて下さいました²⁵⁾。

さらに、吉田氏は、普通科での授業について次のように述べている。

朗読、発音、イントネーションなどはソール先生が教えてくださり、一週の終わりの金曜日にはかかさずスペリングの試験があり、…和訳は日本人の先生²⁶⁾がうけもたれ直訳でした。…一年になったばかりで、英語の字がよく読めない秋の文学会には、ロングフェローの詩“The Arrow and the Song”を暗誦するようにとソール先生に命ぜられていたしました。先生が一句一句ゆっくり美しいお声で仰るのを、ただじっと聞いて先生のあとについて言いました。それをくり返しくり返し毎日練習して頂くうちに、意味は何も解らぬまま遂に何とかおぼえました。…“intonation”と“rhythmically”が先生の英語の文章を朗読する場合のよく言われた御注意でした²⁷⁾。

ここに、生徒の数が少なかった当時の person-to-person 式の指導法が示されている。また、第2節でみたように当時の多くの学校で行なわれていた読み解釈のためだけの英語学習とは違った、発音と英語の話し言葉重視の様がうかがえ、指導法としての暗誦が、先に見たように、やはりここでも用いられていたのがわかる。更に、入門期の生徒達に徹底した発音の指導が行われていたのがわかる²⁸⁾。

1890年に創刊され、その後1896年に同窓会誌になった学内雑誌『めぐみ』の毎号の「院内記事」によれば、内外の外国人がしばしば学校を訪れ、講演をしたり、朝夕の礼拝時に説教をしている。日本人教師によって通訳されたりはしているが、このような機会は、英語以外の学科でも英米人教師によって英語で教えられていたことと共に、生徒達にとって英語学習上聴解力養成の良いチャンスであり、また、伝達の手段としての英語が用いられる生きた見本であったと言える。

以上のように、Brown 校長就任、Searle 女史着任の1883年以来、学校としての発展と共に、英語の授業の充実が計られてきたのである。付表 B にあるように、長期在職の英語教育専任教師である両女史に加え、1890年代には短期在職の外人教師や卒業生教師が専任で教えるようになった。特に、1896年より教師の人数も増え、これは、生徒数の増加と学科組織改正に応じるためであったのと同時に、英語授業の発展を示すものと言える。この両女史の時代に、英語学習という分野が含む内容が明確に区分され、系統化されて教えられ上級学年で統合される、組織的なカリキュラムが組まれて実践されていったのであった。これは科目としての「英語」学習の近代化であったと言える。

付表 A
英語教育史：年表 (19世紀)

欧 米	日 本	神戸女学院
1793 <i>Practical English Course for Germans of Both Sexes, ..., Fick</i>		
1808		
1809	Jan Cock Blomhoff, オランダ人 (日本における最初の英語教師)	
1811	『語厄利亜興学小笈』	
1814	『語厄利亜語林大成』 (日本における最初の英和辞書)	
1828 <i>Webster's American Dictionary of the English Language</i>		
1834 <i>A New, Practical, and Easy Method, Ahn</i>		
1835 <i>A New Method of Learning to Read, Write and Speak, a Language in Six Months, Ollendorff</i>		
1840	『英文鑑』 蘭訳からの重訳 (日本における最初の英文法書)	
1848-9	Ronald MacDonald, アメリカ人 (日本における最初の英米人英語教師)	
1850	『エゲレス語辞書和解』	
1853 <i>Language as a Means of Mental Culture, Marcel</i>		
1855	幕府、洋学所設立 (→ 蕃書調所→洋書調 1856 1862 所→開成所→開成学校→大学南校→ 1863 1869 東京大学→帝国大学) 1877 1886	
1859	『英米対話捷徑』 中浜万次郎 (日本人による最初の英学書) 神奈川、長崎、箱館開港 米人宣教師たち来日	
1862	『英和対訳袖珍辞書』 (開成所辞書) (日本における印刷本としては最初の英和辞典)	
1864 <i>The Mastery of Languages, Prendergast</i>	『英吉利文典』 (『木の葉文典』)	
1865-6 Heness の Yale での 'natural method' による試み		
1866	『英語階梯』 (<i>English Spelling Book</i>)	
1867	『和英語林集成』 Hepburn & 岸田吟香	
1869	M 2 『薩摩辞書』 『ビネオ英文典』	
1873	M 6 『英和辞彙』 柴田昌吉 & 子安峻 12月 David Murray, アメリカ人 Ollendorff の Practice Method を推奨	10月 Miss Talcott (~M12) (M15~M16) Miss Dudley (~M12) 神戸花隈村に私塾を開く
1874 <i>Teaching of Living Languages, Sauveur</i>		4月 私塾 Girls' School 北長狹に移る Miss Gulick
1875	M 8 『語学独案内』 Brinkley	10月12日 Girls' School 授業開始
1876		Miss Barrows 着任 (~M15)
1877 <i>Handbook of Phonetics, Sweet</i>		11月 Miss Clarkson [Mrs. Cady] 着任 (~M15 5月)
1878 Berlitz School, Providence, Rhode Island, U. S. A.	M11	3月 授業公開
1879	M12	『神戸英和女学校』と改称 Miss Clarkson 校長就任
1880 Gouin, Paris で出版	M13 <i>The First Reader of the School and Family Series</i> (ウイルソン 『第一リーダー』 翻刻) ウエプスター 『スプリング・ブック』 翻刻	新課程 (5年制) に基づく新学年開始 4月 吉田作彌 (~M16 4月)

欧 米	日 本	神 戸 女 学 院
1881		
1882 <i>Der Sprachunterricht muss umkehren</i> (Language teaching must start afresh!), Viëtor	M15	1月 Miss Clarkson 榎米 Miss Talcott 校長代理 11月 Miss Brown [Mrs. Harkness] 着任 (~M22)(M23~M25 11月) (M30 3月~M32 12月)
1883	M16	10月 Miss Searle 着任 (~T4) Miss Brown 校長就任
1884 'On the Practical Study of Language', Sweet		
1885	M18	高等科 (英語科・漢文科) 設置
1886 Passy of the Phonetic Teachers' Association, Paris	M19 「英語発音秘訣」菊地武信、清水彦五郎、フルベッキ (日本で最初の音声学書)	宮川とし [平田] (~M24)(M26~M28)
1887-8 Klinghardt の Reichenbach での試み	M20 「外国語研究法」マーセル著吉田直太郎 訳 (日本で最初の英語学習法解説書)	学科組織改正 [予備科2年 本科4年 高等科1年] 英文学会創立
1888 <i>Teaching of Languages in Schools</i> , Widgey	M21 「ウエスター氏新刊大辞書和解字彙」イーストレキ & 棚橋一郎	
1889	M22 文部省『正則文部省英語読本』外山正一 編集 『新訳和英辞典』井上十吉	
1890	M23	学科組織改正 [入学資格を高等小学校卒業と改める。本科4年 高等科1年] 8月 雑誌「めぐみ」創刊 (M29 同窓会雑誌となる) Miss Griswold (~M24)(M27~M29 2月)
1891	M24	学科組織改正 [予備科2年 本科3年 高等科3年] 10月 Miss Stone (~M25 2月)
1892 <i>The Art of Teaching and Studying Languages</i> , Gouin	M25 英語雑誌「日本英学新誌」(~M34廃刊) 『雙解英和大辞典』島田豊	Brown 校長休暇榎米 Miss Searle 校長代理
1893	M26 「英会話文法」斎藤秀三郎 「外国語教授法改良説」崎山元吉	9月 平田(宮川)とし (~M28 7月)
1894	M27 「外国語教授新論」岡倉由三郎	2月 Miss Griswold (~M29 2月) 校名「神戸女学院」と改称
1895	M28 高等師範学校に英語専修科設置 "The Study of Foreign Languages in Japan" 神田及武	
1896	M29 「和英大辞典」Brinkley 斎藤秀三郎 正則英語学校を創立。 "English in Middle Schools" 神田及武	学科組織改正 [予備科2年 本科3年を普通科5年とする] 10月 Miss Swartz (~M30 4月) 10月 Miss Willcox (~M31)
1897 International Phonetic Teachers' Association	M30 「英語教授法」外山正一 「外国語雑誌」創刊 (~M31 廃刊)	Mr. Stanford (~M31)(M33~M36)
1898	M31 「実用英文典」斎藤秀三郎 (日本人による最初の本格的英文法書) 英語雑誌「青年」創刊 (→「英語青年」)	
1899 <i>Practical Study of Languages</i> , Sweet <i>De la Methode Directe dans Langues Vivantes</i> , Passy	M32 <i>Intermediate English Grammar</i> 神田及武	私立学校令により学院の設立認可される。 8月 Miss Searle 院長就任 9月 Miss Chandler (~M37 9月) Miss Shaw [Mrs. Wheeler] (~M34 6月) 西川(山家)悦 (~M39)(T3 9月~T4 3月)(T6 9月~12月)
1900	M33 <i>Higher English Grammar</i> 神田及武	Mr. Stanford (~M36)

付表 B
英語教師 1873~1900

1873	M 6	Talcott (英語) Dudley (英語)	10月10月		
1874	M 7	Gulick			
1875	M 8				
1876	M 9	Barrows (英語)			
1877	M10	Clarkson (英語)		11月	
1878	M11				
1879	M12		秋 秋		
1880	M13	吉田作彌 (英語)		4月	
1881	M14				
1882	M15	Brown (英語) (Talcott) (英語)		1月	11月
1883	M16	Searle (英文)		4月	10月
1884	M17				
1885	M18				
1886	M19	※宮川とし (英語)			9月
1887	M20				
1888	M21				
1889	M22				
1890	M23	Griswold (英語) (Brown)			
1891	M24	Stone (英文学)			10月
1892	M25				2月
1893	M26	(平田(宮川)とし)			9月
1894	M27	Griswold			
1895	M28				7月
1896	M29	Swartz (英語) Wilcox (英語)			2月 10月10月
1897	M30	Stanford (Brown)		3月	4月
1898	M31				
1899	M32	Chandler (英語) Shaw (英語) ※西川(山家)悦 (英語)			9月 9月 9月
1900	M33	Stanford (英語)		12月	

M36
M37 9月
M34 6月
M39

(就任・退職月は明らかなもののみ記載)
※は同窓生

T 4
6月

注

- 1) 彼自身の言葉では impression と expression
- 2) the art of speaking foreign languages idiomatically
- 3) the series
- 4) Henry Sweet (1845~1912)
- 5) p. 15
- 6) p. 14
- 7) Claude Marcel (1793-1876)
- 8) 神田は、アムハースト大学在学中、当時アメリカで評判をよんでいた Sauveur (前述 p.75) の natural method を知り、アムハーストで開かれた夏期学校でその授業を受け、影響を受けたともされている。(cf. 高梨・大村 p. 139)
- 9) 1836-1911
New England に生まれ、早く両親に死別。Miss Sara Proter Boarding School で学び、さらに New Britain の州立学校で学んだ後、母校 Miss Sara Porter で教職に就いたが、病弱の叔母の看護のため家庭に帰り10年間過ごしていた。
- 10) 1840-1906
Chicago 付近で生まれ、Rockford Seminary で学んだ後、数年教職に就いていたが、その後病母の看病に長年を過ごしていた。
- 11) Talcott 女史所蔵であったものが神戸女学院図書館本館にある。
The Peep of Day; or a series of the earliest religious instruction the infant mind is capable of receiving. Springfield, Mass.: G. & C. Merriam. 1 課~6 課はキリスト教信仰に基づく道徳的教え、7 課~12 課は創世紀、13 課~53 課は新約聖書の教えについて書かれている。
- 12) DeForest (1950) p. 2. 筆者私訳。
- 13) 新約聖書翻訳完成は1880年。
- 14) 1841-1925
Dudley 女史の従妹。Mount Holyoke Seminary 出身。
- 15) 後に Mrs. C. M. Cady. 1850-1940
Massachusetts 州の Newburyport 出身。Mount Holyoke Seminary で学び、Salem 教師養成学校を卒業。その後4年以上の教職経験があった。
- 16) Cf. 「クラークソン書簡一訳および註(三)」pp. 51 & 52.
- 17) 「クラークソン書簡一訳および註(二)」p. 50.
- 18) Op. cit. p. 41
- 19) 同志社出身。英語、理科担当。
- 20) 『神戸女学院史 50年』p. 21.
- 21) 後に Mrs. J. Harkness. 1858-1925
Minnesota 州の Granger 出身。15才で教師資格を得た。Carleton College 卒業。
- 22) 1858-1951
Michigan 州の Niles 出身。Wellesley College 卒業後 Carleton College の予備科で2年間教鞭をとっていた。
- 23) 普通科第1回(1882年)の卒業生。
- 24) 普通科第20回(1903年)、高等科第25回(1908年)の卒業生。
- 25) 本城智子「神戸女学院の英語教育」『神戸女学院百年史 各論』p. 424.
- 26) 西川(山家)悦(在職1899-1906, 1914-1915, 1917)であろうか。普通科第10回(1893)、高等科第16回(1899)卒業生。
- 27) Op. cit. p. 425.
- 28) この発音の指導の様子は、1950年代当時の中学部1年4月の授業でも基本的に変わらなかった。

参考文献

- DeForest, Charlotte B. (1950). *The History of Kobe College*. Kobe College 「神戸女学院75年史」
- Howatt, A. P. R. (1984). *A History of English Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- 伊村元道・若林俊輔 (1980). 『英語教育の歩み』英語教育シリーズ4. 中教出版.
- 片山 寛 (1935). 『我国に於ける英語教授法の沿革』研究社.
- 永盛 一 (1983). 『英語の教育』スタンード英語講座 9. 大修館.
- 日本の英学100年編集部 (1968). 『日本の英学100 明治編』研究社.
- 大村喜吉・高梨健吉・出来成訓編 (1980). 『英語教育史資料』第3巻. 東京法令出版.
- . 『英語教育史資料』第5巻. 東京法令出版.
- 岡田美津 (1936). 『女子英語教育論』研究社.
- Richards, Jack C. & Rodgers, Theodore S. (1986). *Approaches and Methods in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高梨健吉他 (1979). 『英語教育問題の変遷』現代の英語教育 1. 研究社.
- 高梨健吉・大村喜吉 (1975). 『日本の英語教育史』大修館.
- 若山晴子他 (1978). 「タルカット書簡——訳および註(一)」『神戸女学院大学論集』Vol. 24. 3. 神戸女学院大学研究所.
- (1979). 「タルカット書簡——訳および註(二)」『神戸女学院大学論集』Vol. 25. 3. 神戸女学院大学研究所.
- (1982). 「ダッドレー書簡——訳および註(一)」『神戸女学院大学論集』Vol. 28. 3. 神戸女学院大学研究所.
- (1982). 「ダッドレー書簡——訳および註(二)」『神戸女学院大学論集』Vol. 29. 1. 神戸女学院大学研究所.
- (1983). 「バロウズ書簡——訳および註」『神戸女学院大学論集』Vol. 29. 3. 神戸女学院大学研究所.
- (1983). 「クラークソン書簡——訳および註(一)」『学院史料』Vol. 1. 神戸女学院史料室.
- (1984). 「クラークソン書簡——訳および註(二)」『学院史料』Vol. 2. 神戸女学院史料室.
- (1985). 「クラークソン書簡——訳および註(三)」『学院史料』Vol. 3. 神戸女学院史料室.
- (1986). 「クラークソン書簡——訳および註(四)」『学院史料』Vol. 4. 神戸女学院史料室.
- (1987). 「クラークソン書簡——訳および註(五)」『学院史料』Vol. 5. 神戸女学院史料室.
- (1989). 「ブラウン書簡——訳および註(一)」『学院史料』Vol. 7. 神戸女学院史料室.
- 『創立五十年 神戸女学院史 明治八年 大正十四年』(神戸女学院 1925)
- 『神戸女学院八十年史』(神戸女学院 1955)
- 『神戸女学院百年史 総論』(神戸女学院 1976)
- 『神戸女学院百年史 各論』(神戸女学院 1981)
- 『めぐみ』第1号～第12号(神戸英和女学校 1890～1895)
- 第13号～第25号(神戸女学院同窓会 1896～1900)
- “Kobe Girls' School Circular” (1877) [Searle 先生自筆]
- 「神戸女学院規則」(1899)
- 学科表 (1891, 1896, 1899)
- 『七一雑報』3巻第11号 (1878)

(原稿受理 1989年9月18日)